

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
95

2024. 4

年間テーマ ～あきらめない 平和への道を とともに～



カトリック玉造教会（カテドラル）とカトリック桜町教会（旧高松教区カテドラル）

※大阪高松大司教区のホームページより引用

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区 社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203 Email/sinapis@osaka.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



高山 徹神父

新しいいのち

主のご復活おめでとうございます。喜びと希望を分かち合えますように。

今年の復活の主日は 珍しく3月31日でした。そして、あくる日、4月1日(月)が社会的にも新年度の開始となります。日本の年度システムは世界的に珍しいものと伺ったことがあります。特に今回のご復活翌日の年度開始は、ある意味で摂理的な連動を勝手ながら感じております。それは、新しく年度を始めることで、何か新しいいのちの意味に繋がるからかもしれません。

現実には、一新どころか惰性を、新しいいのちどころか変わらない古めかしさを、依然として覚えてしまうこともあるやもしれません。それでも、新しくされることを求め続ける限りにおいて、私達は変わっていく可能性をもっています。何よりも、復活の神秘は恵みです。私達は既にいただいている恵みの大きさ・確かさに気づいていかねばならないのだと思います。

この4月1日をもって、宗教法人カトリック大坂高松大司教区が歩み出します。アジアの教会全体を見ても新しい取り組みです。四国の司祭として、旧大阪教区の皆様には、これから宜しく申し上げますと申し上げたいです。時として、統廃合や合併は、ネガティブな印象も付きまといますが、むしろそれこそ前向きに捉えていく必要があると感じています。昨年の世界代表司教会議(シノドス)では、地域教会のグループ化や国際的な教会管区の設立による連帯や協働が検討されました。(*「まとめ」報告書参照) 今や教会や世界は、様々な諸課題を前に皆で共に取り組むことが求められています。

かの実存主義哲学者のキルケゴールは言っています。「人生とは、解決すべき課題ではなく、味わうべき神秘である」と。答えの容易に出ぬ中であっても、その時その時の恵みを味わわせて頂く…変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する知恵が与えられますように。

年間テーマ

～平和を目指してともに歩もう～

身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26:52)と言われたイエスの生き方に倣い、暴力に打ち勝つ強い信念をもち、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。このニュースが皆さまといっしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

「在留特別許可嘆願署名キャンペーン」に関する

ご報告とお礼

日本カトリック司教団は、2021年12月の難民移住移動者に関する研修会で、日本で生まれ育った在留資格がなく、強制送還の危機にさらされている外国ルーツの若者の証言を聞きました。



それを受け、日本のカトリックの司教として何が出来るかを申し合わせ、2022年3月25日に吉川禎久法務大臣へ要請書を提出し、同年8月より「在留特別許可嘆願署名キャンペーン」をカトリック中央協議会ウェブサイト上で展開しました。

そして昨年、長きにわたりこの問題と向き合ってきたたくさんの方々のたゆまぬ努力と私たちの行動が、一つの実を結びました。政府に私たちの声が届き、在留特別許可の対応が一部見直されることとなったのです。

2023年後半から、外国ルーツの子どもたちに在留特別許可が下りはじめ、今年に入って、私たちの研修会で証言して下さった若者とその弟さんにも在留許可が下りたとの報告を受けました。

私たちはこの結果を大変喜ばしく思っています。

賛同して下さった皆様に心からの感謝を申し上げます。

ご理解とご協力、本当にありがとうございました。

引き続き日本の司教団のためにお祈りください。

よろしく願いいたします。

日本カトリック司教協議会

会長 菊地 功大司教

ウエルカム シナピス DAY

3月20日(祝)を終えて

旧大阪大司教区の社会活動センターとして活動してきた「シナピス」が、大阪高松大司教区の発足にあたり、旧高松司教区の皆さまと共に歩いていくための交流の機会を企画しました。

「教区召命の日」(3月20日)のミサ後12:00~15:00に予定し、多くの方と交流ができることを楽しみに準備をしてきましたが、天気予報は「大荒れの春の嵐！」

「多くの方が来てくださるかなあ」と心配しましたが、前田大司教様や村田神父様はじめ、“開店”と同時に会場いっぱいにも多くの方の笑顔が広がりました！

シナピスのこれまでの活動を紹介する展示、テレビで取り上げられたシナピスの活動の上映、シナピス工房の作品販売・・・テーブルではお茶をいただきながら楽しい交流。

ここに集う人は、自然環境や人を大切に思い、平和を願っている人だと感じました。そして、これだけ多くの方からシナピスの活動が支えられていることを改めて実感し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

「3月27日(水)聖香油ミサの後に、もう一度、“ウエルカム シナピス デイ”をしましょう！」と、スタッフ一同、多くの皆さまに「シナピス」の活動を知っていただき、「もっと交流したい！」という気持ちになりました。これからも「シナピスの活動」に応援とご協力をお願いします！



世界の出来事とシナピスの20年間の歩みを掲示



シナピスホームの説明をするビスカルド篤子さん



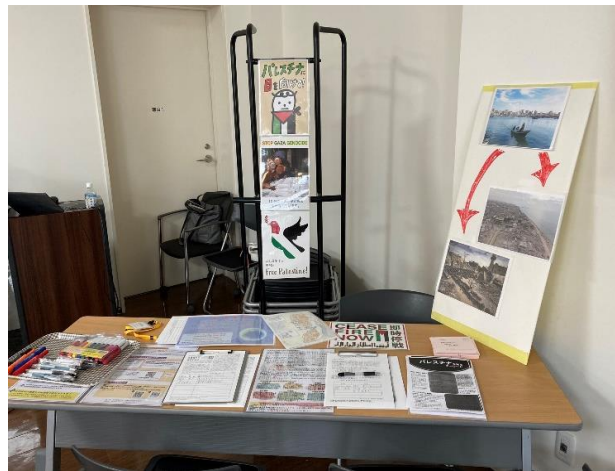
スタッフの説明を聴きながら、にこやかに
談笑される前田大司教と来場者



たくさんの来場者の交流と親睦の場に！



参加者が書いてくださった
シナピス応援メッセージ



「永住者」の在留許可を持つ外国籍住民から永住
許可を取り消す法律に反対！ ガザに平和を！
などの署名コーナー



シナピスグッズ”の販売コーナーでは、“難民さん”やボランティアさんが心を込めて作って
くださったコースター、上履き、腕カバー、「アベノマスク」利用の布巾、シュートたわし
など、環境問題を考えた“芸術品”がたくさん！

2024年 教区平和旬間テーマの趣旨文



「いまこそ平和を」 — 苦しむ人びとの声に耳を傾け、応えていこう —

日本カトリック平和旬間は、1981年に訪日した聖ヨハネ・パウロ2世教皇がヒロシマで行った平和アピールに応じて1982年に日本司教団によって制定されました。その期間が広島原爆の日8月6日から終戦記念日の8月15日の10日間とされたのは、教皇が何度も繰り返した「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです」という言葉に基づいています。過去の過ちを決して繰り返してはならないという日本のカトリック教会の強い決意のあらわれです。

昨年新しく設立されたわたしたち大阪高松教区では、旧大阪教区がこれまで行ってきた平和旬間行事を踏襲し、共通テーマのもとに、教区として取り組みます。地区・ブロック・小教区で、共に平和について考え、祈り、行動して参りましょう。

今年の「今こそ平和を！～苦しむ人びとの声に耳を傾け、応えていこう」というテーマは現代の世界情勢を意識したものです。人類は20世紀の忌まわしい戦争の記憶から何も学んでいないかのようです。すでに2年が経過するウクライナ戦争、ガザにおけるイスラエルとハマスの軍事衝突は、和平への道筋が見えず、今もおびただしい数の犠牲者をもたらしています。

ヨハネ・パウロ2世は、平和アピールの最後に創造主である神に祈りました。

「神よ、わたしの声を聞いて下さい。それは個人の間、また国家の間でなされたすべての戦争と暴力の犠牲者たちの声だからです」

「神よ、わたしの声を聞いて下さい。それは人々が武器と戦争に信頼をおくとき、いのちばんに犠牲者として苦しむであろうすべての子ども達の声だからです」

「神よ、わたしの声をきいて下さい。わたしたちがいつも憎しみには愛、不正には正義への全き献身、貧困には自分を分かち合い、戦争には平和をもってこたえることができるよう、英知と勇気をお与えください」

今年も巡ってくる平和旬間において特に、戦争や、武力による争い、暴力によって、愛する人を失い、傷つき、悲しみ、あえぎ苦しむ人々の声に耳を傾け、死と破壊をもたらす戦争が1日も早く終わることを祈りましょう。そして単なる願望でなく、今、自分自身の置かれた場で、キリストの平和を実現するために具体的に何が出来るかを共に考え、行動に移しましょう。

2024年2月10日

平和旬間準備会事務局

2024 平和旬間 ヘッダー募集

今年の平和旬間（8月6日～15日）に使用する「ヘッダー」（画像）を、広く募らせていただきます。

ヘッダーは、『カトリック大阪高松大司教区報』の平和旬間関連のページに掲載したり、各小教区の平和旬間イベントのチラシ等に使用させていただきます。

今年の平和旬間のテーマは

「いまこそ平和を一苦しむ人びとの声に耳を傾け応えていこうー」です。

このテーマにふさわしいヘッダーの制作をお願いします。

- sinapis@osaka.catholic.jp 宛てにメールでお送りください。
（JPEG、PNG 等のデジタル画像でお送りください）
- オリジナル作品であること、未発表の作品であることが条件です。
- 採用させていただいた方には、シナピス工房で制作したカードのセットをお送りします。
- 応募締め切りは、4月15日（金）です。

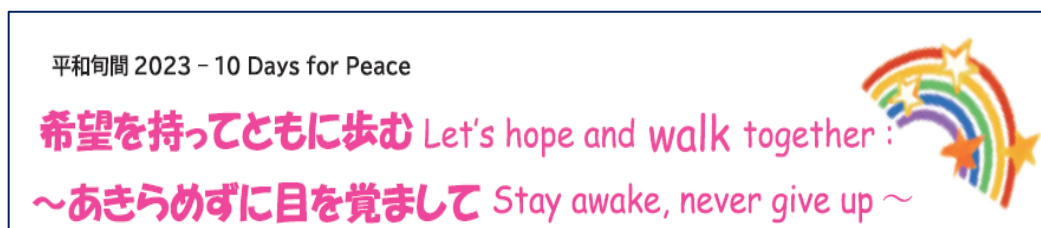
※選者に関するお問い合わせにはお答えできませんので、ご了承ください。
また、選者結果についても（採用者を除き）ご連絡いたしません。

※ご参考（これまでのヘッダー画像）

2022 年平和旬間



2023 年平和旬間



大阪大司教区社会活動 50年の歩み

日本の司教団は、第二バチカン公会議の精神に沿って、教会が今の日本の社会にとってさらに意味のあるものとなる道を探るために、1970年代初頭より司教団の活動を刷新する作業を始めました。それは具体的な形となって17年後のNICEに現れることとなります。

《カリタス運動》

特筆すべきは、「思いついたらそれに向かって突進していく情熱と使命感」にあふれたライムンド・チネカ神父（フランシスコ会・写真）存在です。「関西いのちの電話開局」、釜ヶ崎での「老人食堂」や「こどもの広場」など、多くの信徒がチネカ神父とともに、活動の場を広げていきました。



このような活動が、教区でボランティア活動を根付かせようという思いにつながり、「カリタス大阪」の立ち上げにつながりました。この「カリタス運動」が、1975年に日本に漂着したインドシナ難民の受け入れの土台となりました。

インドシナ難民の受け入れについては、カトリック教会は日本政府よりも動きが早く、チネカ神父やハリー神父（淳心会）など欧米の宣教師がけん引役となり、難民と各地域とをつなげる重要な役割を果たしました。

《釜ヶ崎の仲間と連帯する》

労働者の街・釜ヶ崎では、古くから「ひとの命」を大切にする運動が、労働者を中心に続けられてきました。釜ヶ崎で様々な活動をしていたキリスト者も、1970年代には、労働者に連帯するために「キリスト教協友会」を結成。それは、「宣教のためではなく、労働者を中心に、労働者とともに働く」というテーマを明確にして、「人を人として」をスローガンにしています。本田哲郎神父が長く施設長を務めているフランシスコ会の「ふるさとの家」をはじめ、曙光会（エマウス運動）、また各修道会がエキュメニカルにつながり、今に至っています。

《全小教区に設置された「福祉委員会」》

ベトナム戦争によって多く生じたインドシナ難民が日本に漂着した1975年以来、大阪大司教区ではインドシナ難民の支援から始まった「カリタス大阪」を中心に、全小教区に「福祉委員会」が設置され、貧しい立場に置かれた人々への援助活動が積極的に行われました。

《平和をつくる人になるための実践を模索する80年代》

1981年の教皇ヨハネ・パウロ二世の来日を受けて、翌1982年に日本カトリック教会は8月6日から8月15日までを「日本カトリック平和旬間」と定め、毎年「平和祈願ミサ」を行ない、平和をつくる人となる決意の姿勢が示されました。

社会にコミットする教会の具体的な取り組みとして忘れてはならないのが、「指紋押捺問

題」への取り組みでした。

これについて当時の安田久雄大司教は、「教会が日本の入管法の抜本的改正に取り組むのは、この法が日本国において弱い立場に置かれる人々の人権と尊厳を傷つけているからだ」と明言し、1985年よりプロテスタント教会とともにキリスト者として関わる意義を示しました。在日韓国・朝鮮人とその支援者から始まった指紋押捺反対の大きなうねりの中で、シスター マリア・コラレス（聖母被昇天修道会）など、キリスト者も主体的に指紋押捺を拒否して連帯を表明。やがて指紋押捺制度廃止が実現しました。

《大きな転換期 NICE（福音宣教推進全国会議）》

こうした社会に開かれた教会を具体化する大きな転換期は、1987年のNICE（福音宣教推進全国会議）でした。

第一回NICEは、「信仰と現実の生活、教会と社会が遊離することに気づき、それに打ち勝つため社会に開かれ、社会とともに歩む教会になろう」と決心するものでした。

これを受けて大阪教区では「大阪教区の全員・全組織・全活動がさらに福音化され宣教に向かう出発点になってこそ意義あるものとなる」として、組織改編に向けた準備が進められました。

1988年に「日本カトリック正義と平和協議会」の全国大会が大阪で開かれた際には、大阪教区から500人を超える参加があり、翌1989年に大阪教区「正義と平和」が発足する運びとなりました。

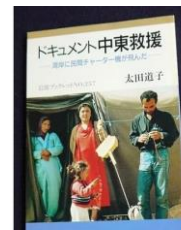


《湾岸戦争と「平和の手」》

1991年に湾岸戦争が起こったとき、日本政府は自衛隊機で戦争避難民を輸送することによって、事実上自衛隊の戦争加担に足を踏み入れようとしていました。

何とか止めたいと知恵を絞った末に、松浦悟郎神父（現・名古屋教区司教）などが「クウェートの戦争避難民を自衛隊機ではなく民間機で安全な国へ送迎しよう」と代替案を思いつき、松浦神父が中央協議会の事務局次長職にあった神林宏和神父に「これを日本カトリック教会の運動にしてはどうか」と相談しました。その結果、チャレンジすることとなり、大阪教区発で呼びかけました。

この「民間機チャーター」募金運動はたちまち全国に広がり、2か月足らずで2億8千万円を超える額が集まり、この支援金で民間機を2機調達するという大きな実りをもたらしました。民衆の手で日本国が戦争に加担するのを未然に防ぐことを実現したのです。まさに平和をつくる具体的な社会貢献として、大阪大司教区社会活動の歴史に刻まれる運動となりました。



写真：『ドキュメント中東救援—湾岸に民間チャーター機が飛んだ』
1992年6月19日 太田道子（岩波ブックレットNO. 259）

この運動の成果を受けて、翌 92 年には大阪教区「正義と平和」協議会とカリタス大阪が中心となって「信仰や宗教などの違いを超えて平和のために力を尽くす人々の働きを結びつける役割を担うこと」を使命とした「平和の手」を立ち上げました。

「平和の手」はその使命を実現するために、「全世界のマスコミに現れない現地の実情をきめ細かく集め、災害や紛争にあった人たちが最も必要としているものは何かということをも的確に把握するために、私たち自身ができるだけ現地を訪れ、人と人のつながりを通して血の通った助け合いをしよう」と、信徒の太田道子さん（左は、当時の写真）をセンター長にして働き始めました。



しかし「平和の手」は、これまでの大阪教区になかった規模の運動と使命を担っていたため、何年も試行錯誤が続き困難な道の始まりとなりました。

こうした「全教区民が平和を実現する使命を持つ」という大阪教区の歩みは着実に裾野を広げてゆき、1990 年には「部落問題と人権を考える『信徒の会』」が発足、1992 年には滞日外国人と連帯する「国際協力委員会」が発足しました。

また 1993 年に立ち上がった「生涯養成コース」も司祭・修道者だけでなく、信徒も加わるなど、それぞれの立場から互いに教会運動を支え合う体制が整い、様々な形の教会運動が活発化しました。

1990 年代から大阪教区の外国人信徒数が飛躍的に増えたことを受けて、1993 年より「国際協力の日」を「平和旬間」と並んで教区行事と定め、他宗派と共にエキキュメニカルな共生社会を目指す「祭りの日」としました。



*現在は「インターナショナルデー」と呼ぶ。



「国際協力の日」のスローガンは、「外国人が暮らしやすい社会は、日本人にも暮らしやすい」

大阪教区の「平和旬間」：1981 年、聖ヨハネ・パウロ二世教皇が来日。広島で、「過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことである」と述べられました。戦争を振り返り、平和を思う時、平和は単なる願望ではなく具体的な行動でなければなりません。

そこで日本のカトリック教会は、その翌年、最も身近で忘れることのできない、広島や長崎の事実を思い起こすのに適した 8 月 6 日から 15 日までの 10 日間を「日本カトリック平和旬間」と決めました。教区、地区、小教区で平和祈願ミサを捧げ、「平和のために何ができるか」を考え、実行する決意の時となっています。

《阪神・淡路大震災と「新生」》

大阪教区にとって特筆すべき出来事は、1995年の阪神淡路大震災で被災した経験でした。大震災を体験した大阪教区は、困っている人、苦しむ人、社会から忘れられている人を思い、大切にしようという人々の願いを実現すべく「新生計画」を打ち立てました。

「新生計画」とは、大阪教区の刷新、すなわち一人ひとりが新しく生きる信仰共同体となるための意識の転換、組織改編、新たな養成を進めることを目的とした運動で、これは大阪教区が、真の福音を宣べ伝える教会となるために、二度にわたる「福音宣教推進全国会議」を通して進めてきた歩みと一致したものでした。



『「新生」の明日を求めて』—交わり証しする教会』の表紙
(1998年発行)

ありのままの自分を表し、それを互いに受け入れ合う。「分かち合いの意義とルール」を周知し、真の共同体を生むこと。外国人を「お客さん」としてではなく、一緒に共同体を作っていくメンバーとして受け止め、具体的な活動の中でともに働く…ことなど



左) 焼失した「カトリック鷹取教会」と火災をくい止めたとされるキリスト像
右) 新しく建てられた「たかとり教会」前のキリスト像

《福祉委員会から社会活動委員会へ》

この組織改編の中で大きく発展したのが「社会活動委員会」でした。カリタス大阪時代より全小教区に存在していた「福祉委員会」を2002年に「社会活動委員会」と改め、地区ごとに定例会を持ち、広く連帯しながら活動してゆくことを目指しました。

《難民支援活動とシナピス》

同時に、「人としての権利と尊厳を守る」部門として、既に活動していたカリタス大阪・「正義と平和」・平和の手・国際協力委員会の四組織をひとつにして「シナピス」と改名し、全小教区の社会活動委員会を支える組織として教区本部に事務局を置きました。

21世紀に入り、世界状況が劇的に変わり、中でも紛争や気候変動の影響で移住を余儀なくされる難民が保護を求める相談数は、大阪教区でも多くなりました。シナピスでは教区内外の協力を得て、シェルターを確保しながら、法律家や各分野のNGOと連帯し、「人を見捨てない」運動を続けています。

こうして社会活動の50年を振り返ると、大阪教区社会活動委員会とシナピスは、「イエスに倣い、イエスの歩んだ道を自らの行動で示してこられた先人の生き方を受け継ぎ、教会内外の「人を大切にする」目的でつながる人々に連帯して、新しい人になる道(刷新運動)を貫いてきたと言えると思います。この「新しい人となる」という姿勢は、次の50年、100年にも受け継がれ、生かされることを期待します。



ふっこうのかけ橋 スタディーツアーに参加して

カトリック六甲教会信徒 井川 伸子

2011年3月11日、東日本大震災で多大な被害を受けた原発被災地を、2023年11月23日（木）～25日（土）に訪れ、いろいろなことを学んできました。

私はこの被災地のことは、今までテレビのニュースや新聞などのメディアを通じてしか知らされていませんでしたが、実際現地に行って、最初に衝撃を受けたのは、仙台空港から車で15分程北に行った宮城県名取市の^{ゆりあげ}閑上浜の広大な更地でした。

12年前は、たくさん家が建ち並び、漁港町として栄えていた住宅街が、静まり返り家の跡形もなく、震災メモリアルだけがひっそりと立っていました。

すぐ近くには綺麗な海があるのに、それが大地震によって、悪魔の海に変わり10m以上の高さの巨大な黒い波が一気に街を飲み込んでしまったのです。

被害の甚大さに胸が詰まる思いで、犠牲者たちに手を合わせました。



メモリアルの近くの小高い丘の上には、同じ大震災を受けた兵庫県神戸からの”鎮魂と希望の桜”が植林されていて、その桜が3mぐらいの高さになっていました。

その日は、廃校となった荒浜小学校と中浜小学校を見て回りました。数年前校舎を地面から2mかさ上げ工事したおかげで津波の高さから免れ、屋上の屋根裏倉庫に避難し助かった話や、ヘリコプターで屋上から児童を一人ずつ救出し、翌日の昼までに全員救助した話など、当時の話をガイドの人から息をのむ思いで聞き入り、その時の緊迫した様子が目に浮かぶようでした。

2日目は、カリタス南相馬の所長・南原摩利さんが車で南相馬の地域周辺を案内してくださり、福島県双葉町の福島第1原子力発電所の跡地と、東日本大震災・原子力災害伝承館や、東京電力廃炉資料館を見学し、津波、地震で電源が切れ、水素を冷やす冷却装置が作動なくなり、水素爆発により原発事故に至った様子などモニターを通して詳しく説明してもらいました。

それから浪江町の震災遺構請戸小学校を見学。浪江町の沿岸部では、15.5mの津波で家々が飲み込まれてしまいましたが、請戸小学校の教職員と児童は的確な判断で、校舎から1.7km離れた大平山に向かって必死に逃げ、野球部の男子児童が山の入り口を知っていたので、その児童について全員大平山の頂上に着いて助かったそうです。



先生!こっちだよ。

その翌日の最終日には、請戸小学校とは対照的に、校舎のすぐ近くの裏山に逃げ込んだら助かったであろうに、避難ルートを誤ってしまったがために、ほぼ全員津波に飲み込まれてしまった大川小学校などを視察し、改めて、津波や地震といった自然大災害が生じた時の避難場所の決断と迅速な行動が生死を分けるだということを感じました。

そのあとは、硯の産地としても有名な雄勝町の病院慰霊碑を訪れました。

慰霊碑には名前と年齢が刻み込まれていましたが、多くの人が高齢者である中、20代の若い女性のかたもいらっしゃいました。恐らく高齢者の介護を最後まで成し遂げていた若い看護婦さんだったに違いありません。身につまる思いでした。

雄勝漁港近くには、今は巨大防波堤が築き上げられていますが、高い防波堤で美しい海が見えなくなったのは残念にも思えましたが、仕方がないのかもしれない。

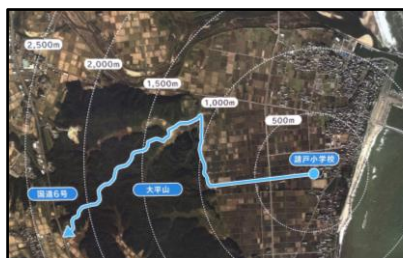
今回の2泊3日のスタディーツアーでは、たくさんの慰霊碑、廃校、発電所の廃炉などを目の当たりにし、肌で被害のすさまじさ、残された人の悲しみを感じました。

今回見て回った所は、東北の青森から福島にかけての震災伝承施設がある「旅の伝承ロード」のほんの一部にしかすぎませんでした。多くの教訓を学ばせていただき、とても意味深いツアーでした。

ご家族を亡くした人の心の傷跡は、簡単に消えるものではなく、また助かった人たちの間でも国からの支援金をめぐって様々な問題が生じているようですが、その中でも、明るい知らせも心に残りました。

当時5、6年生だった生徒が、被災している場所から今何をしてどのように過ごしているかを綴った作文が廃校になっていた小学校の壁に貼ってありました。はっきりと正確には覚えていませんが、「震災があったから、みんなの命を救いたいと思って看護学校に入ることを目指しています」とか、「僕がいま、生きていられるのは、その時の街の人や先生のおかげです。僕も人を助けるような人になりたいです。」等々。

災害に遭って苦しい思いをしたのに、逞しく未来に向かって前進していこうとする子どもたちの姿にも感動し勇気づけられました。



先生と児童の避難経路



位置関係がわかる写真



復興に向けて！

「救すことは、どんな兵器よりパワフルです！」

カトリック仁川教会信徒 土器屋 香代子

右の写真は、戦争の悲惨さを世界中の人に示した「ナパーム弾の少女」（公式名：「戦争の恐怖」）です。ベトナム戦争中の1972年6月8日、写真の真ん中の少女キム・フックさん（本名ファン・ティ・キム・フック 9歳）は、「熱すぎる、熱すぎるよ」と叫びながら、燃え上がる衣服を1枚ずつ脱ぎ捨てて逃げ惑っていました。

写真家ウト氏は、シャッターを押して、すぐに彼女の体に水をかけ、負傷した子ども達を自分の車に乗せ病院に運びましたが、彼女の火傷のひどさに助かる見込みはないと判断されて、死体安置所に寝かされたそうです。現場にいた英国人ジャーナリストも協力し、設備の整った別の病院に転院できたので、17回の手術と14か月の入院生活の末、奇跡的に命をつなぐことができました。



ベトナム人写真家ニック・ウト氏撮影。ニック氏は、撮影の翌年21歳の時にこの写真で、ニュース速報写真部門でピューリツァー賞を受賞。最年少での受賞でした。



この写真のこともすっかり忘れていた昨年末、出版されたばかりの『海を渡った「ナパーム弾の少女』』という本に出会い、彼女のその後を知ることとなりました。

その本の表紙は、2022年7月初旬にポーランドの首都ワルシャワの空港に降り立った飛行機の写真で、機体の側面一面に「ナパーム弾の少女」の写真と「NO WAR」（戦争反対）という語が刷り込まれていました。（左:の写真）

フックさんは、ウクライナからの避難民236人をその飛行機内に笑顔で迎え入れ、彼女の住むカナダへと飛び立ったのです。移民・難民によって国家を形づくったカナダは、ウクライナ避難民の受け入れも早々に表明しており、このフライトも、この措置をうけて企画されたそうです。

（左写真：『海を渡った「ナパーム弾の少女」戦争と難民の世紀を乗り越えて』（藤えりか著）の表紙写真より

フックさんはナパーム弾で大火傷を負い、激痛を伴う治療…その後も、汗腺がないための体調不良、神経障害に悩まされるなど、心身に大きな痛みを抱え、「あの時、死んだ方が良かった」と何度も思ったそうです。ポートピープルになることも試みましたが、体力的にできず3度も失敗。母国で生きる決意をし、「自分のような子どもを助ける医師になりたい」と医師を目指し、医学学校に合格。しかし、戦後は「反米」の象徴として政府のプロパガンダに利用される日々で、体力的限界もあり医学の勉強を断念せざるを得ませんでした。「なぜ私はこんなつらい目に遭うの？」と、毎日怒りに震えていました。しかし、心の平安を求めていた20歳の時、「汝の敵を愛せよ」という「聖書」の教えに出会い、気持ちが少しずつ変わっていったそうです。

「楽しい思い出に満ちていた生活は、ナパーム弾で一気に暗転し、火傷痕を抱えた青春期は

何度も自信を失い、何度も絶望し、枯れるほど涙を流しました」・・・外国メディアの取材にはいつも政府の監視がつき自由に話すことはできませんでしたが、「西側」の記者たちとの触れ合いを通じて、「西ドイツ訪問や治療に繋がり、クリスチャンになったことも、彼らの側にある自由を垣間見るきっかけになった」そうです。その後、政府からキューバへの留学を命じられ、本国より厳しい監視が付きまとい、怒りが彼女を襲いましたが、そこで生涯の伴侶・トワンさんと出会い、癒しと希望になりました。「新婚旅行はモスクワ」と、またも政府から決められ、不満だらけ。しかし、モスクワからの帰り、給油のためにカナダの空港に飛行機が1時間だけ停まり・・・その1時間で、カナダへの亡命を果たしたのでした。

(カナダの入国審査官は、助けを求める人にもてなしの心で接してくれたそうです。)

「自由を得たい。自分の手で人生を取り戻したい」という強い気持ちが、たった1時間の給油時間でカナダへの亡命を成功させたのでしょ。お金も身寄りもないカナダで、新しい人生を歩むことになりましたが、カナダでの生活はフックさんを「憎しみ」から解放していきました。

「爆撃で従兄弟二人が目の前で亡くなりました。1200度の炎にさらされ全身に大火傷を負い、死んでもおかしくなかったのに、生きながらえ、幸いにも手と顔と足は焼けずに済んだ。こんなに幸運なことはあるでしょうか」と思えるようになったのです。

「私の心はブラックコーヒーが注がれたカップのようでした。怒りや憎しみでどす黒く染まった感情でいつもいっぱいでした。何とかぬぐい去ろうとしても、すぐにブラックコーヒーで埋まってしま。しかし、心の平安を取り戻して未来を生きていくには、自分を苦しめてきた人や環境を赦さなければならないと思いだめたのです。

赦すことは人生で最も困難なことでしたが、そうすることで、心のブラックコーヒーは少なくなり、次第に透き通るようなきれいな水で満たされるようになりました。

赦すことがどんな戦争の兵器よりもパワフルだと悟ったのです」

《退役軍人の苦しみと彼らへの赦し》

ベトナム戦争で心身ともに傷を負った退役軍人も、戦場のトラウマや負傷の後遺症に苦しみ、母国の人々にまで白眼視されてきました。そのような社会情勢の中で、フックさんは33歳の時、ワシントンDCで開かれたベトナム戦争追悼式典に招かれ、「平和な社会にするために、一緒に未来へ歩みだそう」とスピーチをすることになりました。その中に、メソジスト教会のブラマー牧師もいました。彼もベトナム帰還兵で、多くの戦友と同様に、一時はアルコール依存症になり、結婚生活も破綻。折りに触れてナパーム弾で火傷を負った少女の悲鳴が付きまとい、生活も崩れていきましたが、敬虔なクリスチャン女性の支えを得られ1991年に神学校に入り、その4年後に牧師になった人です。

ナパーム弾の投下を命令したかつての米軍兵士・ブラマーは「この村には民間人はいなくて大丈夫だと言われ、爆弾投下を命令した。それでも良心の呵責から逃れられません」と告白。

キム・フックさんの腕の中に倒れ込んだブラマー牧師に、彼女は「お会いしたかったです。赦します。赦したいと心から言いたかったからです。私たちは過去の歴史を変えることはできませんが、現在と未来のために、善い行いをして平和な未来に向けて努力することができます。赦すことは、どんな兵器よりもパワフルです」と伝えました。

二児の母親となった1997年、彼女は戦争・紛争被害の子ども達を支援する「キム財団インターナショナル」を設立。同年、ユネスコ親善大使に就任し、平和な世界を目指して活動を続けています。

「満州」引揚難民体験がつなぐ今

カトリック高槻教会信徒 高木 洋子

〈はじめに〉

2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻、民間人の虐殺ニュースを聴きながら、ソ連兵（当時両親は「ロシア兵」と呼んでいました）に銃を向けられた幼い頃の恐怖の体験を思い出しました。

私は、1940年7月3日に撫順の満鉄病院で生まれ、満鉄社宅で育ちました。やがて撫順から奉天（現・瀋陽）へ移り住み、国民学校の一年生となりました。

1945年8月8日、ソ連により「日ソ中立条約」が破棄され、翌9日150万人ものソ連軍による「満州」への侵攻が始まり、彼らの蛮行は南下する開拓団を追って、当時住んでいた奉天（現・瀋陽）にも及びました。

《編集部より》

日露戦争後、日本は中国の遼東半島南部支配のため、「国策会社」南満州鉄道株式会社（満鉄）を設立。その権益防衛のため関東軍を設置した。関東軍は1931年、満州事変を起こし中国東北部を占領、関東軍が実権を握る傀儡国家「満州国」を建国、支配を拡大した。中国は国際連盟に提訴、総会は日本の侵略と認め、撤兵を求められた日本は国連を脱退、国際的孤立の道を歩み、日中全面戦争、アジア・太平洋戦争へと向かった。日本の敗戦により「満州国」は崩壊した。

「満州国」には植民地経営、開拓のため、200万人を超える日本人が送り込まれ、敗戦前後、いち早く関東軍が退却する混乱の中、20万を超える人々が犠牲になった。残留日本人、中国帰国者の問題も現在の日本社会の課題となっている。

〈ソ連兵が我が家へ〉

置き去り日本民間人を狙ったソ連兵の略奪・蹂躪・婦女暴行は凄まじく、我が家への侵入も度重なるようになりました。中でも次のような侵入は忘れられません。

トラック一台に乗り込んだソ連兵たちが我が家を選んだのです。玄関の小さな部屋に逃げ込みましたが、襖の向こうに銃を持ったソ連兵、家の中も外周りも兵士が囲い込んでいる状態でした。

引揚用に床下や天井裏に準備した荷物さえ一切合切を強奪。生まれたばかりの妹のおしめまでも奪われた…と母は怒っていました。父の留守を狙って侵入し、子どもたちは母と引き離されて別室へ。

私達子どもは一列に並ばされ、大きな体格の兵士が目の前で銃を突き付けているので、母の所に行けません。時折、母の叫び「ニエツ！ ニエツ！」。（No！ No！ の意味）

ある夜、隣の奥さんが下着のまま、隣の家族も一緒に、我が家に飛び込んで来られました。そして、我が家が戦場となり、全員が壁に向かって「ホールドアップ！」。

父が蹴られ、隣家の息子が部屋の隅に銃で追い詰められ、金を出さないと殺すという。

母が「これだけは…」と隠し持っていた弁当箱を天井に向かって投げ、甲高い声で、「これを持って行きなさい！」と。弁当箱の蓋が開き、中の紙幣が空中に舞い、ひらひらと畳に落ちてきました。

兵士たちは競って拾い集め、姿を消しました。そのお金の中には、6歳の私も妹と市場に並んで万頭（まんとう）を売って得た貴重なお金も入っていたのです。

ひどい時には、ソ連兵が夜になると突然侵入してくるために、布団を敷いて寝ることが叶わず、母の膝枕で仮寝をしました。彼らは、トイレの窓ガラスを破って侵入してくることもありました。

こんな状況の中、近所に住む中国の皆さんの親切が忘れられません。タイタイ（奥様）は、よく大皿いっぱい餃子を持ってきてくださいました。近所の子ども達と一緒に縄跳びをして遊びました。

ご近所に最後の挨拶に回った時、ある家で「洋子ちゃんを置いていかんかね」と言われたと言います。母は「とんでもない！」と断ったそうです。

幼い子どもながら考えました。

「どうして戦争が起きるのだろう・・・」と。

「どうして銃を持った兵士が襲ってくるのだろう。お友達になればいいのに・・・」と。



〈引揚—葫蘆島波止場へ〉

やがて引揚のために、奉天から葫蘆島（地図上の矢印 瀋陽から南西に約 300 km）まで移動することになり、持てるだけの物を持ち、無蓋貨車に乗りますが、途上でソ連軍・八路軍の攻撃があるので、列車の時間は定まりません。停車時間が「トイレタイム」で、夜に父は3歳の妹を連れて貨車を降り、抱いて用を足していると、前から狼が近づいて来ました。片手で辺りを探り、枯れ木を掴んで振り上げると狼は消えましたが、その狼の目を父は絶対に忘れられないと言っていました。決して、安全な道中ではありませんでした。

《編集部より》：八路軍：1937年8月～1947年3月まで存続した

中国共産党直系の中国国民革命軍第8路軍の略称

〈子ども達が行方不明？ 姉の手・親達の阻止〉

途中で貨車が停まると荒野に無人の収容所があり、全員がそこで次の貨車が出るのを数日待つことになりました。大陸の暑い8月！近くの川へ遊びに出かけた時のことです。

宿泊地の収容所へ戻ってくると、誰もいない！掃き掃除をしている老人に尋ねると、「どこに行っていたのだ！貨車がすぐに出るって、親たちが必死で探し回っていたぞ！」と。

貨車が出た方向を聞いて、一斉に走り出した・・・どこまで走るかもわからず、無我夢中で走りまわりました。姉は、泣きながら走る幼い私の手をぐいぐい引っ張って走りました。山裾を廻ると、遠くに貨車が見えました！父や母たちが大声で叫んでいる！間に合った～！

子ども達が親の腕に飛び込むと、どの子も叩かれました。

後で聞くと、親たちが手を組んで貨車の出発を止めていたそうで、姉は私の手を離したら二度と会えなくなると言ったと語ってくれました。姉は、命の恩人です。

〈妹がいない・・・〉

葫蘆島までの道のりは長く、貨車を降りてひたすら歩く。親の後に続いて歩きますが、空腹と疲れで、この難民行列は次第に長くなります。ふと振り返ると、3歳の妹の姿がないことに気付き、父と母は荷物を放り出し、妹の名前を叫びながら駆けもどって行きました。

後で聞いた話では、妹は行列も途絶えた夕暮れの無人の橋で泣きもせず一人で立っていたそうで、「泣かなくて良かった！日本の子どもは高く売れたので、気づかれたら攫われているところだった」とのこと。

〈波止場の長い行列〉

たどり着いた葫蘆島の埠頭で長い行列を作ると、中国兵が「ここへ並べ！」という。しばらくすると「別の所へ並べ！」と。ヨロヨロしながら、また別の場所に！父が「ここは賄賂を渡さなければダメだ」と賄賂を渡すと、その効果はてきめんで、乗船準備となりました。

〈船底で寝るー「島が見えたぞ〜」 ー佐世保港へ〉

船底は、狭くて仰向けには寝られない。横向きのまま、自分の場所を確保する。やがて夜が明ける。甲板に出てみると、人でいっぱい！誰かが叫ぶ。「お〜い、島が見えたぞ〜！」と。その瞬間、どよめきが甲板に広がる。私も人垣の中から、彼方に見える島、日本の島を見ていました。

1947年8月9日の朝のことでした。



〈佐世保上陸 福岡から点々と貧乏生活〉

佐世保に入港し下船すると、まず DDT（シラミやノミなどの衛生害虫の駆除剤）噴霧が待ちました。頭皮、頭髮、お尻、足に至るまで全身が真っ白になりました。

《編集部より》1945年8月15日の敗戦に伴い、海外から約629万人の日本人が引揚げ、このうち佐世保の浦頭には、1950年4月までに軍関係者、民間人合わせて約140万人が上陸。引揚者の多くは、栄養失調や下痢・皮膚病、敗戦の失意と迫害のために疲労困憊の状況で、上陸と同時に検疫を受け、7キロの山道を歩き、佐世保引揚援護局までたどり着き、引揚手続きを終えると衣服や日用品の支給を受け、それぞれの故郷へと向かった。（浦頭引揚記念公園・資料館資料参照）

父の故郷・福岡の田舎の叔母の家に転がり込み、地元の小学校へ通いました。その後、父が仕事を求めて転々とし、兵庫県姫路市から播但線の列車に乗って、仁豊野の元兵舎だった小屋に住みつきました。6畳一間に、いとこの家族と一緒に12人が住みました。

煮物用の火鉢と外にある共同風呂の薪集めは、私達子どもたちの仕事で、裏山へ出かけて薪を集めました。遠方の小学校へ通いましたが、いじめられてよく泣きました。

やがて、播但線のさらに奥に位置するのどかな香呂に住み、小学3年生で地元の小学校へ転校しました。優しい女の先生で、私にとって初めて「学校は安全な場所、楽しい場所」となりました。

この小学校の隣の中学校、やがて姫路城の東にある高等学校へ進学し、貧しいながらも部活動や生徒会で活動し、充実した青春時代を過ごしました。高校を卒業し、姫路市内の銀行で7年間働き、その後結婚。近くの英語教室へ通い、Home Teacher 資格を取って自宅で英語教室を開校…。

この様に充実した幸せなある日、新聞報道された一つの記事に目が釘付けになりました。タイトルは「ナパーム弾に怯える子どもたち」。「1972年6月8日、南ベトナム側の戦闘機がナパーム弾を落とす。9歳だったキム・フックさんの全身を炎が包んだ。熱い、熱い！燃える服を脱ぎ棄て、泣き叫び、走った」・・・この恐怖と緊迫感が、一瞬にして私自身の幼い頃の恐怖と重なりました。

あれから80年近く経っても、戦争は無くなっていません。さらに蘇る幼い頃の思い、「どうして戦争が起きるのだろう・・・。お友達になればいいのに・・・。そうだ！お友達同士になろう！

〈3つのプロジェクトで平和づくり〉

現在、私は3つのプロジェクトを進めています。そのうちの2つは iEARN プロジェクトで、タイトルは Machinto-Hiroshima/Nagasaki for Peace と GOMI on EARTH と言います。

3つ目は、ANNE FRANK Panel Exhibition in Japan です。アムステルダムからの ANNE FRANK House から日本に送られてきた34枚の大型パネルが、全国各地で展示されることを願っています。展示ご希望の方はご連絡ください。

世界中に友達がいて、お互いに慈しみの心を持って会話ができる環境こそが平和な世界への第一歩になると思い、80歳を超えた今も「友達作り・平和作り」を目指しています。

（連絡先）080-5322-2750（高木 洋子）

本の紹介

移民の子どもの 隣に座る

大阪・ミナミの「教室」から

著者: 玉置 太郎(朝日新聞記者)

朝日新聞出版 本体1700円+税

バブル期のフィリピン女性への
興行ビザ。
戦前ブラジルへ 出稼ぎに渡っ
た日系人の還流。
戦後の中国残留からの帰国。
在日コリアン……
日本有数の歓楽街
住民の3割以上が
外国籍の街に暮らして
見えたこと

第31回

坂田記念ジャーナリズム賞

が発表され、「国際交流・国際貢献報道」新聞の部で、朝日新聞ネットワーク報道本部の玉置太郎記者による『「大阪・ミナミで暮らす移民家庭との共生に向けた取り組み」に関する一連の報道」が選ばれた。外国にルーツを持つ子どもの支援団体で、10年前からボランティアをしながら取材。蓄積した取材をこの本にまとめたことなどが評価された。

【3/14 朝日新聞朝刊より】



なぜ 彼らは “ここ”にいるのか

火曜の夜、私には行く場所がある。

居酒屋、焼き肉、スナックと、連なるネオンの間を人波が満たす。関西随一の繁華街、大阪ミナミ。町外れにある古びた三階建ての建物に、その場所がある。

薄暗い階段を上がっていくと、三階の一室から子どもたちのにぎやかな声が漏れてくる。

その声に迎えられるように、今週もここに來られた喜びが膨らんでいく。

その場所には「Minami こども教室」という名前がある。

教室に集まる子どもたちはみんな、移民のルーツをもっている。親の両方、あるいはどちらかが移民である子どもたち。海外から日本に移り住んできた子もいれば、日本で生まれ育った子もいる。(中略)

私は十年ほど前から、教室で学習支援のボランティアをしてきた。きっかけは新聞記者としての取材だったが、通ううちに居着いてしまった。
(「プロローグ」より)

「国防」をうたい棄民亡国へ突き進む人々へ
島々から平和への切なる祈りをこめて

『標的の村』『沖縄スパイ戦史』
三上智恵監督最新作

戦 いくさふむ 雲

3月16日から順次全国の映画館で上映！ お近くの上映館をご確認の上ぜひご覧ください。

与那国ブルー。与那国島の海の色はどこまでも深く、濁りのない紺色だ。エメラルドグリーン^の渚に彩られた八重山の一角にありながら、孤高の輝きを放つ離れ島。この島が太古から育んできた豊かな自然と神々が、どんなに誇り高い人々の暮らしとまつりを生み出してきたのか。本来は声高にいう必要はない。けれどもこの島を不沈空母としか見ない輩がいる。反撃を受けても被害を局限できる要塞にするという痩せた感性しか持たない人々によって、いま島の生命線が絶たれようとしている。戦争をしない監視部隊と聞いて受け入れた自衛隊と共に暮らして8年。しかし最近戦車^が来る、PAC3も来る、シェルター、巨大軍港の整備にミサイル基地増設と要塞化に歯止めがない。知らぬ間に全島避難の計画もできあがっていた。

戦争へと突き進むこの国は、また南西諸島を最前線に押し出す。その流れを止めたいのにズルズルと軍事化を許したこの8年は取材者にとっても試練だった。しかし、苦し紛れに撮り溜めた映像の一部を番外編（スピンオフ）として世に出したところ、上映会は全国で1,300を超えた。「もっとちゃんと伝えてほしい」。その声がエールとなってこの映画の製作を支えてくれている。ドキュメンタリー映画の可能性を見失いかけていた私を^{ただ}糾してくれたのは、過去の映画でつながった、全国の一人ひとりの思いだった。見るのが辛いシーンも「よっしゃ！受け止めるぞ！」と待っていてくれる観客がいると知ってつながることができる。これまでで最も悲愴で、しかし最も幸せな映画になるかもしれない。

タイトルの「戦雲」は、山里節子さんが「また戦雲が湧き出してくるよ、恐ろしくて眠れない」と歌った石垣島の抒情詩とうばら一まの歌詞からいただいた。石垣島の発音で「いくさふむ」とした。島々で踏ん張る人々と共に、戦を告げる不穏な雲を吹き飛ばす力が沸き上がってくるような映画にしたい。

三上智恵

(2023年12月20日都内編集室より)

日本カトリック難民移住移動者委員会（J-CaRM）から

しよめい

署名(しよめい・Shomei)のお願い

Petition
#against
the revoking
of permanent
residence
status



えいじゅうきよか とりけ
永住許可の取消しに

eiju kyoka torikesi

はんたい
反対します

hantai

オンライン署名

<https://change.org/2024-02-27>



人権を守れ！！ 生存権を奪うな！！



日本政府は、「永住者」の在留資格を持つ外国籍住民が、税や社会保険料を納めない場合などに、永住許可を取り消せるようにする入管難民法の改正案を今国会に提出する予定です。

働き手はほしいけど、日本にとって“都合の悪い”外国籍住民の滞在・在住を望まない政府による人権無視法案。

厳しい審査を経て永住許可を得た外国籍住民は、日本で働き、子どもを育て、日本を終の棲家と決めて暮らしている人たちです。そのような人たちは最大限、日本国籍者と同等に扱われるべきです。

やむを得ない理由で税金や社会保険料を滞納することは誰にでもあり得ます。

法令違反に対しては、日本国籍の人と同じペナルティで十分なはず！

外国籍者であるがゆえに在留資格が取り消されるのだとすれば、外国籍住民に対する差別です。すでに帰る故郷を失っていることの多い永住者の生活の基礎となる在留資格を奪うことは許されません。

自治体職員などが入管に通報する制度を創設することは、「共生社会の実現」への逆行でしかありません。

私たちの隣人、同僚、友人である外国籍住民に対して、一生厳しい管理・監視を続け、その地位をはく奪しうるものとする永住許可取り消し制度の導入に、強く反対します。

締切：1次 2024年3月31日 2次：2024年4月20日

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いたします。

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

難民移住者への支援物資提供も

よろしくお願いたします。

米、ハラル食品、レトルト食品、油、
テレフォンカード、レトルトご飯、缶詰

お電話をお待ちしています！！

☎06-6942-1784



シナピス公式

さまざまなお知らせや情報を発信！

友達追加は 📱 QR コードから 📱



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

先日、シナピス・ウエルカムデイのために、シナピス設立後20年余りの年表をつくりました。社会の動き、教会の動き、そしてシナピスがどんなことに取り組んできたのかを時系列に示し、関連する写真や新聞記事なども貼りました。

壁一面を埋めた長尺の年表をじっと眺めていると、毎年毎年、自然災害や戦争、差別や排除など、さまざまな出来事が生じていることがわかります。それに対して教会もシナピスも、(力の足りないことも多いけれど)真摯に対応してきたことが読み取れます。

たまには、自分たちの取り組みを俯瞰してみることも大切だと思います。これからどんなことに注力すればいいのか、どんなことに気を遣えばいいのか、活動のあり方を見直す機会にもなりそうです。

5月25日には、「社会の福進化をめざすキリスト者のつどい」が開催されます。私たちの日頃の取り組みを見直しなが、新たな力を湧きおこす機会にできればと思います。

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいたします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ～「あきらめない 平和への道をと共に」～

シナピスの風

*掲載行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。 第166号 2024年4月1日発行

4月の祈り

イエスの復活を祝って

慈しみ深い父よ、
喜びのうちにイエスの復活を祝っています。
あなたの御手にすべてをゆだねて
十字架の上で命を捧げられたイエスは
復活されました。
あなたの望みに応えて人びとを愛し、
人びとのためにすべてを捧げられたイエスを
死刑にしてしまった「この世」の罪は
明らかになり、
「この世」の闇に大きな光が輝きました。
憎しみ、不正、死に対する
愛、正義、いのちの勝利です。
すべての人びとに大きな希望を与えます。
イエスの復活を喜びのうちに
祝うわたしたちは、
現代社会においてこの勝利を証しし、
イエスの復活の光に導かれて
歩みたいのです。
わたしたちを支えてください。
主イエス・キリストによって。アーメン



すべての人の平和を願い
戦争をしない 軍隊を持たない
この憲法9条を世界の宝に

今 平和が危ない！ 日本はまた戦争する国になるの？

～今、わたしにできること～

日時：2024年4月20日(土)13:00～15:30
会場：サクラファミリア(大阪梅田教会)3階聖堂

I部(講演):松浦 悟郎司教(カトリック名古屋教区)
互いを大切にしよう関係の実現という視点から、非暴力・非軍事で平和をつくるために、私たち一人一人が何をすべきかを共に考えましょう。

II部(意見交換) ゴロー司教と平和を語ろう！
平和をつなぐために、「わたし」にできることをさがし、見つけませんか？

申し込み：不要
参加費：不要

主催：ピース9の会 大阪の集い実行委員会
共催：ピース9の会 堺グループ
後援：カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター シナピス
連絡先：090-2113-9943 (Peace9 かけはし・どきや)

*サクラファミリア (地下鉄御堂筋線 中津駅4番出口より 230m
阪急 大阪梅田駅 茶屋町口出口より 200m)

シナピスホーム

★毎週土曜日 13時ごろ～16時ごろ
4月の開催：6、13、27日
★月1回ランチ(要予約)
4月20日(土) 11時～16時

支援のお願い

感謝

日持ちのする食品、ハラル食品、食用油、米、
カップ麺、テレホンカード、など
ご支援をお願いいたします。

社会の福音化をめざす キリスト者のつどい 2024

開催日：2024年5月25日(土)
13時～16時半
*対面とオンラインと両方の参加可
場所：大阪高松教区本部事務局
1階ホール

テーマ：「苦しむ人々の声に
耳を傾け応えていこう」

参加対象：社会活動委員会をはじめ、社会福音化のための
活動に携わっておられる方なら、どなたでも参加出来ます
申込み締切日：5月13日(月)



「点訳版」「音訳」
ご希望の方はシナピスまで
お申込み下さい。